令和７年度　鳥羽市地域課題解決調査研究事業

「こどもの居場所づくり」が

地域のコンテクストに与える影響についての

フィールドワーク

――持続可能な公共空間のために――

調査者：

名古屋市立大学大学院人間文化研究科有志

文責者：

名古屋市立大学大学院人間文化研究科臨床心理コース博士前期課程１年

三好美咲

目次

0. はじめに――調査報告書の要旨 **3**

1. 調査の背景と目的 **4**

1-1 調査対象の背景について 4

1-2 調査者について 4

1-3 研究課題と目的 5

2. 研究方法 **6**

2-1 調査対象と調査手法 6

2-2 調査手続き 6

3. 調査結果（現状の把握） **6**

3-1 子どもたちにとっての「ねやこや」の変容 7

3-1(1)子どもたちの人数と年齢層の量的変化 *7*

3-1(2)子どもたちの遊びかたや過ごしかたの質的変化 *8*

3-1(3)変化の背景要因の仮説 *8*

3-2 大学生の受容状況 10

3-2(1)学生の人数と所属の量的変化 *10*

3-2(2)学生の過ごしかた、受け入れられかたの質的変化 *11*

3-2(3)変化の図解と展望の仮説 *12*

4. 課題構造の分析（学問的な解釈） **13**

4-1 公共空間における意味の生産 14

4-2 子どもの発達段階 14

4-3 〈居場所〉をとりまく構造的課題 15

5. 課題解決に向けて（現場への提案） **17**

6. おわりに――調査の限界と展望 **19**

付録：調査期間内の活動記録 **20**

0. はじめに――調査報告書の要旨

本調査は**「つくった〈居場所〉を持続可能な公共空間にするためにはどうしたらいいか」**という問いに答えようとするものである。鳥羽市答志島和具地区にある「ねやこや」を対象として、地域にその空間がどのように受容されてきたか、どのような課題を抱えているかを明らかにする。調査としては特定事例を対象にしたが、地域の公共空間をどのように維持していくのかという普遍的な問いを扱うため、これからの施設整備・地域事業について横断的に応用できるものであると考える。

本調査の意義として２つを挙げたい。

① 資料的意義：新しい取り組みであった「ねやこや」について現時点での総括を報告した。

② 探求的意義：〈居場所〉づくりについて「公共空間における関係性をいかに持続的に支えるか」という視点を提案した。

調査では〈居場所〉を固定的な施設としてではなく、地域における生活の文脈や人間関係のなかから生まれる力動的な空間としてとらえる。この考えかたから明らかになった課題は、**内部・外部の人材と地域資源を文脈づける中間支援機能の不在に起因する構造的問題**である。今回は子どもたちと大学生が主な登場人物となっているものの、鳥羽市にあたっては、これら個別の活動への直接介入というよりもむしろ**関係人材間の調整および制度設計を担う役割が求められている**と提言したい。

Fig. 1 「ねやこや」に遊びに来てくれていた子どもたち（令和５年４月）

1. 調査の背景と目的

1-1 調査対象の背景について

少子高齢化などの社会の変化に伴い、子どもが自由に過ごせる空間は減少している。「こども家庭庁」が設置され（令和 4 年法律第 75 号）「こどもの居場所づくりに関する指針」（令和 5 年 12 月 22 日閣議決定） が定められるなど、地域での「こどもの居場所」をつくることが強調されてきた。鳥羽市も例外ではなく、人口高齢化が進行している。人口 16,250 人に対して 65 歳以上の高齢化率は 41.7%であり（鳥羽市オープンソース：令和 7 年 3 月末日）、全国の高齢化率 29.3%（内閣府：令和 6 年 10 月 1 日）を大きく上回っている。

とりわけ答志島のような離島では、生活環境の制約や人間関係の閉鎖性が、子どもの遊びかたや居場所のありかたに影響を与える。島内では寝屋子制度の名残もあって、地域全体で育児や教育に取り組もうとする／取り組まざるを得ないという風土があり（内山 2008[1]、村本・遠藤 2014[2]）、スポーツ少年団やコミュニティスクールといったかたちで実現されている。島内の減りゆくこどもたちに同級生を探そうと、平成 29 年度より離島留学事業「寝屋子の島留学」も実施されている。そんななか、和具地区の空き店舗を「こどもからお年寄りまで誰でもいつでも集える居場所」として改修・運用しはじめたのが「ねやこや」である。地域住民の要望・協力のもと、令和 4 年度に当時の地域おこし協力隊が立案者となって改修が始まった。地域のつながりが綿密ななか、いわば人工的な〈居場所〉づくりである。

1-2 調査者について

調査者は翌年、令和 5 年度に地域おこし協力隊として当地で活動した。「ねやこや」にて放課後・土日に子どもたちを受け入れることを基本として、海洋教育イベントの企画・実施[3]など、運営委員会[4]とともに全般的に運営に関わった。当時はまだ地域における新しい場所であったことから、学校での読み聞かせなどのアウトリーチ、学生の滞在環境や情報網[5]のセットアップなどを行った。

---

[1] 内山 淳子(2008). 地域社会における円環的発達支援――答志島寝屋子制度の変容と存続 日本生涯教育学会論集, 29, 143-152.

[2] 村本 由紀子・遠藤 由美(2014). 答志島寝屋慣行の維持と変容：社会生態学的視点に基づくエスノグラフィー 社会心理学研究, 30(3), 213-233.

[3] 海と日本プロジェクト「三重県鳥羽市答志島にて、ねやこや海洋教育イベント vol.1『みんなでいそあるき」を開催しました！』（https://uminohi.jp/eventreport/2023_neyakoya_isoaruki0617）など

[4] 三重テレビ「ゲンキ！みえ！【鳥羽市】ねやこや運営委員会のみなさん」（https://www.youtube.com/watch?v=Hpqfi0-tLx8）

[5] 「研究成果共有会」報告書（https://drive.google.com/file/d/1jFTmHULzAGhM9o6Da8rXPSNbmuDmzaIp/view?usp=sharing）

そのような経緯もあり、調査にあたっては、私が課題を発見して解決するんだと色眼鏡をかけるよりも、地域の皆さんと自然に交流を保つことを第一に心がけた。**解決を目論むことを入口とするのではなく、地域とのつながりを大切にした出口として、課題を把握できることを目指した**。

1-3 研究課題と目的

近年、地域における「こどもの居場所づくり」が全国的に推進されているが、それらが必ずしも子どもたち当事者にとって意味ある居場所として機能しているとは限らず、取り組みが広がるなかで当初の理念を見失っているという指摘（阿比留 2012[6]）もある。メディアでは〈居場所〉づくりの建物としての設立や非日常的なイベントが取り立たされるが、そこにいる子どもたちの心理的な側面について、質的研究はまだ十分になされていないといえる。質的研究というよりも実践報告にとどまっており（岩垣ら 2020[7]）、調査対象者は利用者ではなく運営者に偏っている（片山 2019 など[8]）ことが現状である。

また地域における居場所づくりにあたっては、ターゲットを限定するというよりも、活動に伴って様々な関係人口が増えることが自然であるし、関係性の拡大がむしろまちづくり志向の〈居場所〉づくりとして機能することにもつながる（湯浅 2017[9]）。しかしながら、こどもの居場所づくりについての調査研究では、いわばそのような副産物は見逃されがちである。

よって本研究では、〈居場所〉の当事者である子どもたちの体験している世界を汲みとることと、〈居場所〉に伴う関係性を広くとらえることを意図として、下記をリサーチクエスチョンとした。

①子どもたちは「ねやこや」をどのように意味づけ、変化させてきたか
②「ねやこや」ではいかなる副産的関係性が生まれ、受容されてきたか

このリサーチクエスチョンに基づいて「ねやこや」の現状を把握することで、課題を見出す。最終的には鳥羽市に汎用的な課題解決のための提案につなげ、**「つくった〈居場所〉を持続可能な公共空間にするためにはどうしたらいいか」**という問いに答えることを目的とした。

---

[6] 阿比留 久美（2012).「居場所」の批判的検討 若者の居場所と参加―ユースワークが築く新たな社会 pp.35-51　東洋館出版社

[7] 岩垣 穂大・長瀬 健吾・扇原 淳（2020). 子ども食堂の役割および継続的な運営に関する研究 日本の地域福祉, 33, 25-36.

[8] 片山 寛信(2019). こども食堂の質的向上に関する一考察―社会的インパクト評価を用いて― 北海道医療大学看護福祉学部紀, *26*, 17-

[9] 湯浅 誠(2017). 「なんとかする」子どもの貧困　角川新書

2. 研究方法

2-1 調査対象と調査手法

対象：鳥羽市答志島和具地区を中心とする子どもたち、地域住民、そこを訪れた学生など。
手法：人類学的なフィールドワークの手法を基礎とした参与観察、非構造化インタビュー。

2-2 調査手続き

令和 7 年 5 月から令和 8 年 3 月にかけて計 10 回、累計およそ 33 日の渡島を実施し、地域行事や日常活動に参加しながら現地調査を行った。なお現地調査期間中には下記のような行動により、**調査がそのまま課題解決のきっかけとなる文脈づくりに寄与するよう心がけた**。詳細は付録資料を参照されたい。

1. 「ねやこや」で子どもたちと遊ぶことや、地域での行事などに積極的に顔を出すことにより、地域の皆さんが「ねやこや」を気にかけたり調査者が帯同した学生に出会うタイミングを増やした。
2. 地域おこし協力隊として行っていたこと（学生を誘って受け入れ漁家の手伝いをしてもらう）を、よりフィックスしたかたち（はんにち結）で継続するため、その運営にたずさわった。
3. 現地調査期間外でも、学生に向けた答志島の PR 活動や、現地調査に学生を誘うなど草の根的な関係性の拡大に努めた。

なお倫理的配慮としては、調査者の所属大学である名古屋市立大学大学院人間文化研究科の研究倫理審査委員会から承認を得た。また「ねやこや」の運営委員会から書面で研究協力の同意を得た。

3. 調査結果（現状の把握）

調査期間中に実施した活動詳細は付録としてまとめた。なお実施上の限界として、調査者がすでに有する関係性への依存が高く、それゆえ関係が特定の領域に限局的になっていることには留意されたい。

ここでは調査結果として「ねやこや」に関わる地域のコンテクストが変化しつつあることを 2 つのリサーチクエスチョン、すなわち下の 2 つに即しながら述べる。

①子どもたちは「ねやこや」をどのように意味づけ、変化させてきたか
②「ねやこや」ではいかなる副産的関係性が生まれ、受容されてきたか

3-1 子どもたちにとっての「ねやこや」の変容

本節では「①子どもたちは「ねやこや」をどのように意味づけ、変化させてきたか」というリサーチクエスチョンに答える。「ねやこや」に対する子どもたちの心象は変化していると言える。令和５年度末に行った簡易的なアンケート（答志小学校から「ねやこや」に遊びに来てくれていた 15 名程度から回答を経たもの）と、今年度に行ったインタビューとの対比から、その変化の要点を述べておきたい。

3-1(1)子どもたちの人数と年齢層の量的変化

令和５年度末に行ったアンケートでは、「ねやこや」への訪問頻度を「ほぼ毎日」～「週に数回」と答えた児童数が６名。「ほぼ来ない」と答えた児童は０名。この結果から、15 名程度の児童が月に数回は訪れており、その中でも５、６人がほぼ毎日のように遊びに来ていた。毎日来るボリュームゾーンの因子としては、和具地区に家があることや、小学校低学年～中学年であること。高学年は、イベントのタイミングやスポーツ少年団の練習等のない土日に訪れることが多かった。なお、中学生は通常授業時には部活動により来られないが、テスト期間などに集団で訪れる状態であった。また、保育所の子どもたちは時折、親の送迎であったり所からの散歩の時間だったりで訪れることがあったものの、小学生ほど頻度は高くはなかった。

Fig. 2 放課後の「ねやこや」２F（令和５年４月）

Fig. 3 放課後の「ねやこや」１F（令和５年５月）

今年度に実施したインタビューでは、「ねやこや」に遊びに来てくれる子どもたちの人数・頻度は残念ながら縮小傾向にあった。毎日のように遊びに来る児童は４名程度で大差ないものの、月に数回でも訪れるような子が減っている。毎日来るボリュームゾーンの因子としては、変わらず、和具地区に家があることや、保育所～小学校低学年であることがあてはまった。小学校高学年～中学生の訪問頻度が、令和５年度に比べると低下している。

これらの結果をふまえて「ねやこや」の現状をまとめると、

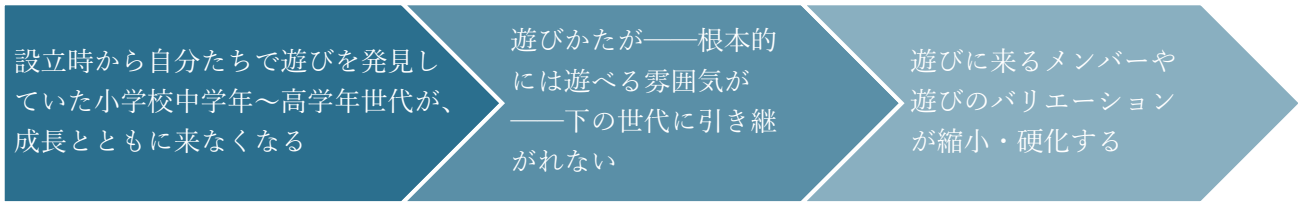
・ひとりで歩いて来られるくらいに家が近く、小学校低学年くらいの子は日常的に遊びに来る
・自転車に乗るくらいの距離に住む子、いわば「機会がなければ来ない子」が来なくなっている
・３年前に遊びに来ていた子が小学校高学年～中学生になり、訪問頻度が減っている

3-1(2)子どもたちの遊びかたや過ごしかたの質的変化

令和５年度末に行ったアンケートでは、どのような遊びをしているか・どのような遊びが思い出に残っているか、自由記述形式で回答を求めた。「おにごっこ」「絵」「ゲーム」「けいどろ」「オセロ」「釣り」「レジン工作」「おかし」など１０種類を超える回答を得た。

今年度に実施したインタビューでは、遊びのバリエーションが縮小傾向にある。「おにごっこ」「ドッジボール」「絵」などは未だに残っているが、それらはどれも周辺の空き地や「ねやこや」１Ｆのみで完結するものであり、２Ｆの部屋を自発的に使うことは減っている。

量的変化、質的変化の両方を合わせると[10]、下記のようなプロセスで変化が生じており、遊びを促進する〈居場所〉としての機能が弱化しつつあると考えられる。この減少・硬化は少子高齢化と運命を同じくして、子どもたちが成長するごとに加速してしまいかねない構造にある。



3-1(3)変化の背景要因の仮説

その背景要因は何か。調査者による仮説は、**子どもたちと「ねやこや」のあいだに文脈を保てていないこと**である。人と場所を文脈づけることとは、初めのきっかけや通い続けるための刺激となったりして、その人の足が自然とその場所に向かうような流れをつくることである。「ねやこや」の場合、子どもたちそれぞれに「学校からの帰りすがらにある」とか「この話の続きをしたい」「ドッジボールを使いたい」など、いろいろなバリエーションがあるだろう。重要なことは、**いくら建物をつくって扉を開けていたとしても、それだけでは人を場所に文脈づけるには足りない、つまりそれだけでは持続的な〈居場所〉にはならない**ということである。

Fig. 5 水槽の水換え（令和５年５月）

Fig. 4 「天才てれびくん」ロケ（令和５年６月）

[10] 量的指標のみからは子どもの満足を測定しきれないため、むしろ質的変化にも着目したい。川嶋 健太郎・北原 靖子・蓮見 元子・浅井 義弘（2010）放課後の児童の居場所へのニーズアセスメント――子どもの発達と教育の視点から―― 川村学園女子大学研究紀要 21(1), 213-227.

かつて令和５年度では、調査者が協力隊として放課後には「ねやこや」にいたため、子どもたちにとって新たな文脈を得る遊びの手がかりになっていたと思われる。特段その遊びの能力が私にあったわけではなく、協力隊の生活上や「ねやこや」の運営上、必要なことをしていたら子どもたちにアトラクションを提供するかたちになっていたと思われる。例えば水槽の水換えも、大人がやってしまえばただの作業だが、子どもたちにとってみれば非日常な水遊びである。協力隊が存在することで、鳥羽市や島の旅社が引き受けていた取材や、観光客の来客の機会に恵まれたときに、子どもたちのイベントごととして位置付けることができた。これらは自分が知っている範囲での例になったが、他にも、近隣の大人が子どもたちの絵描き道具を持ってきてくれたり水槽の魚の成長が子どもたちの興味を引いたりと、様々な人や物が子どもたちと「ねやこや」を文脈づけていたと思われる。

今年度は、協力隊の不在というやむない事情もあり、「ねやこや」での子どもたちの遊びを保ち、高める媒介物がなかったのかもしれない。現状として、遊びを発明していた世代が来なくなった→遊びが引き継がれない→〈居場所〉として縮小・硬化すると分析したが、子どもたちを「ねやこや」に新たに文脈づける媒介物があれば、この負のフローを断ち切ることができると思われる。一度作った〈居場所〉が「行く理由がないから行かない」場所になってしまうのは、もったいないことである。子どもたちの文脈づくりにより力を入れる余地がある。**子どもたちを「ねやこや」に文脈づける人や物の不在**が課題として見て取れる。

ここまで「子どもたちは「ねやこや」をどのように意味づけ、変化させてきたか」というリサーチクエスチョンに答えるため現状を把握してきたが、子どもたちを「ねやこや」に文脈づける人や物の不在により、子どもたちの遊びが縮小・硬化しているという課題を仮説することができた。もちろん私の調査が行き届かない範囲で、子どもたちと遊んだり子ども食堂を開催したりと試みがあったことは併せて述べておきたい。文脈づけが失われつつあることが調査者としては名残惜しく、より発展の余地があるように思われるという意味合いでの「課題」である。

Fig. 6 空き地でドッジボールする子どもたちと名市大生、ねやこや 2F から（令和７年９月）

3-2 大学生の受容状況

本節では「②「ねやこや」ではいかなる副産的関係性が生まれ、受容されてきたか」というリサーチクエスチョンに答える。**今回はとりわけ、島内では貴重とされる大学生世代の関係人口に焦点をあてる**。令和 5 年度に訪問してくれたり誘致したりした学生の受容と、今年度インタビューなどで調査した学生の実態とを比較しながらまとめる。

3-2(1)学生の人数と所属の量的変化

令和 5 年度に（調査者の把握内で）和具地区や「ねやこや」に訪れた学生は、およそ 17 大学（ないし団体）累計およそ 70 名程度であった。特徴としては、団体では日帰りもしくは旅館での滞在となり、その代表者は鳥羽市等他団体との関係性（調査名目・日程の共有など）があった。一方の個人では「ねやこや」や移住体験住宅での長期滞在であり目的・日程はまちまちで、協力隊がコーディネート（調査相手との連絡、場所の案内など）を担うこともあった。とりわけ「ねやこや」での長期滞在は、双方にとって害のないよう顔なじみになってもらうため「ねやこや通信」などで広報も行った。

団体での視察例：事業構想大学院大学（事業デザイン演習Ⅱ）、横浜国立大学（地域課題実習）「島プロジェクト in 鳥羽」、名古屋大学（環境学研究科）、立命館大学（地域観光学専攻）K 教授、東京ビジュアルアーツ（映像学科）、三重県立看護大学、建築学会「海際文化小委員会」

個人での滞在例：茨城大学（人文社会科学部現代社会学科）H.A.さん（→旅館アルバイト）、三重大学（生物資源学部海洋生物資源学科）各種サークルから（→「ねやこや」での海洋教育イベント）、芝浦工業大学（理工学研究科建築学専攻）T.S.くん（→修士論文の調査）、東北大学（文学部人文社会学科）K.Y.くん（→修士論文の調査）、京都府立大学大学院（生命環境科学研究科）T.H.さん（→修士論文の調査）、静岡大学（人文社会学部）S 教授・名古屋大学（環境学研究科）Y 講師（→研究調査）、木浦大学／Mokpo University（→離島留学家族の関係）、岐阜市立長良中学校 H.H.さん（→イベント参加ととわかめ体験）、京都大学（とりわけ熊野寮）（→協力隊の知り合いとして）

なお令和 5 年度のわかめの時期には「結づくりプロジェクト[11]」の事務手伝いも兼ね、学生募集・合宿を実施した（参加者 14 名）。受け入れてくれる漁家さんを事前募集したうえで、学生の来島日程を調整し、午前中の浜作業に学生を割り振りするものである。学生にとっては島で滞在しながらわかめを体験することができ、漁家さんにとっては若者が手伝いにくることで活気を得られることを目指した。

[11] 漁業版ワーキングホリデー「結(ゆい)」については ①https://jf-tiss.net/yui.html ②https://waguura-wakame.jp/about

3-2(2)学生の過ごしかた、受け入れられかたの質的変化

今年後に（調査者の把握内で）和具地区や「ねやこや」に訪れた学生については、**団体での視察は据え置きとして、個人での滞在形態が大きく変わっている**といえる。というのも横浜国立大学（地域課題実習）「島プロジェクト in 鳥羽」が学生合宿（お盆時期）を主催してくれており、わかめ時期の学生合宿も「はんにち結」というかたちで徐々に制度化できてきたからである。視察や調査ほど目的が固まっていない個人単位の学生でも、年 2 回の合宿参加という方法で渡島できるようになった。お盆合宿の参加人数・大学内訳の報告は「島プロ」に任せるとして、「はんにち結」の参加者は 48 名であった。

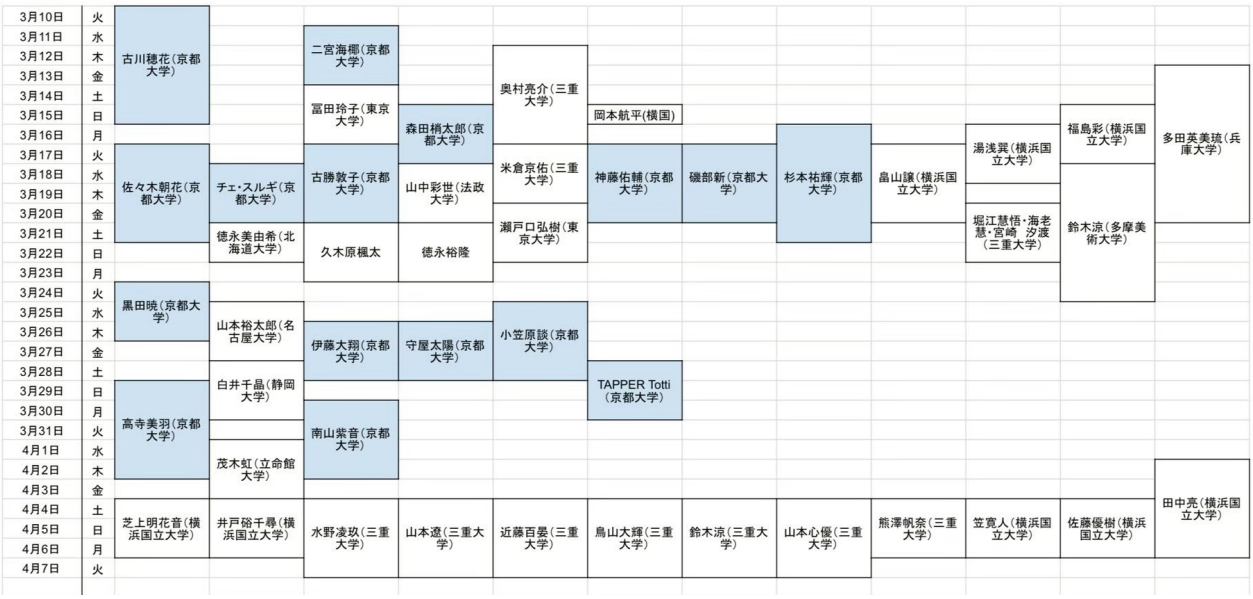


Fig. 7 令和 7 年度「はんにち結」参加者名簿

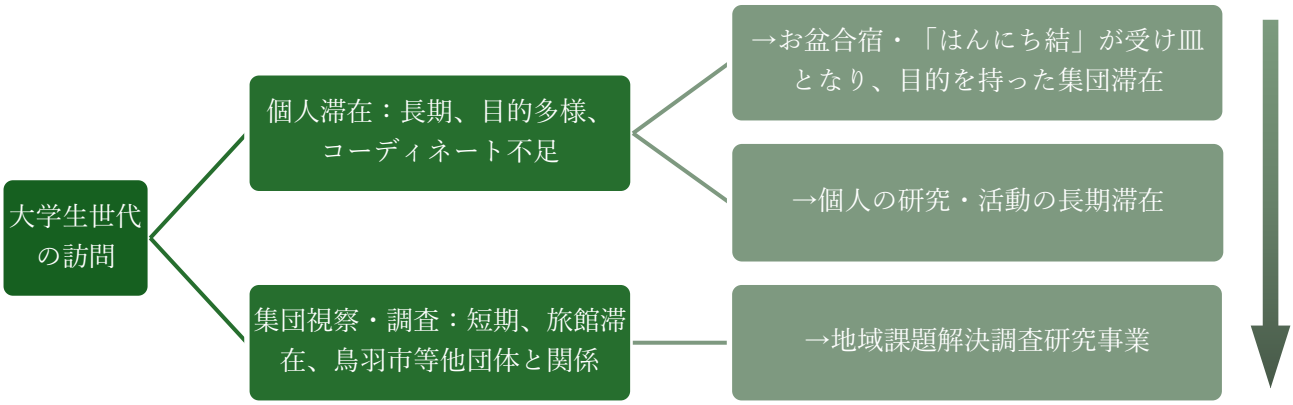
地域の皆さんからしても、大学生がお盆とわかめ時期に渡島することは根付きはじめてきたようである。「はんにち結」の準備や、それに限らず日々の雑談のなかで「次の盆行事もよろしく」「今年のわかめは何人くらい来るんな」と話に出していただくことが増えた。この数年の変化により、和具地区に多いて大学生は、**個人で滞在するための間口が広がったことにより、盆とわかめ時期の年 2 回のタイミングで集団合宿する存在**になりつつあるようである。

大学生の来訪はこのようなかたちで受け入れられている。盆行事の準備の力仕事やわかめの浜作業の面での労働力としても、それから活気づけとしても、学生が根付くことは望ましいと考えられる。ただし「名前は分からんけど、あの大学生たち」というふうに称されたり、「あの子は○○（仕事が早い、返事がいいなど）だったが、あの子は××（手が遅い、無口であるなど）」と比べられることも増えたように思う。これは地域住民が訪問者を選べるようになったという側面でもあり、地域住民と訪問者との個人単位でのつながりが（その数が多いゆえに）浅くなっているともいえる。このように、学生の受け入れられかたは量的・質的にも変化している現状にある。

3-2(3)変化の図解と展望の仮説

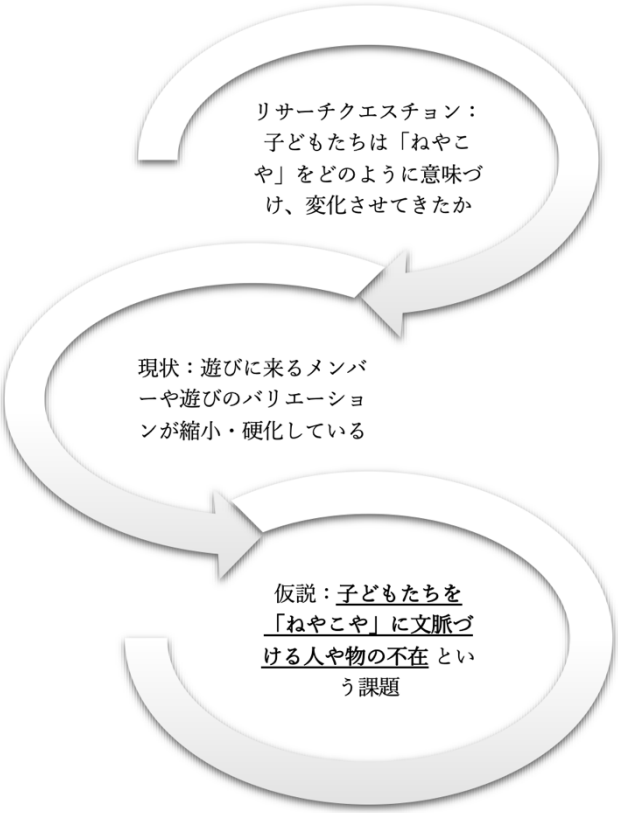
Fig. 8 お盆のビンゴゲームで景品を渡す横国生（令和７年８月）

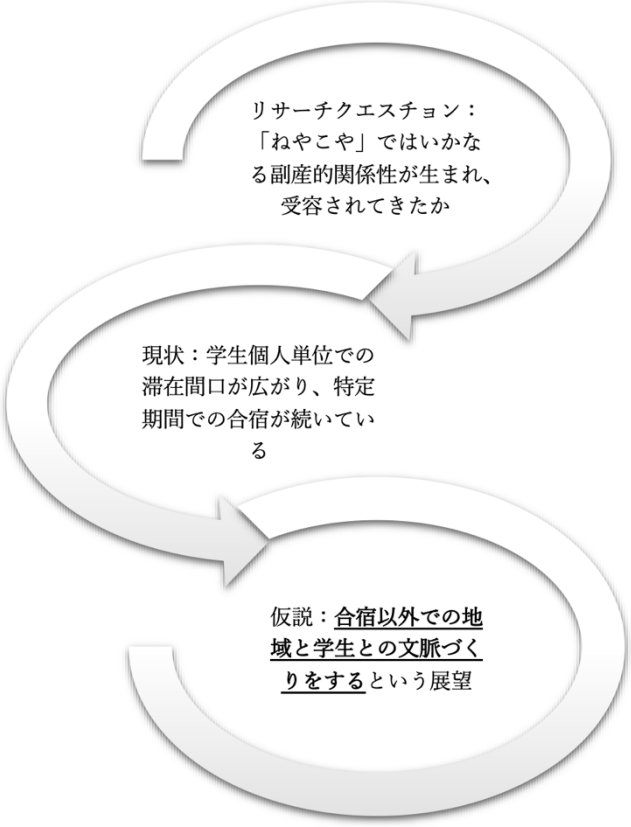
大学生世代の関係人口について、集団単位と個人単位で分かれて変化が生じていた。特に個人単位での関係のありかたの変化は大きく、お盆合宿や「はんにち結」が受け皿となったことで、視察や調査ほど目的が固まっていない学生たちの滞在の幅が広がった。逆にそのような学生にとって、**合宿形式での特定時期の滞在以外での地域との関係性は、開拓が待たれる**ところである。これからの展望として、地域でのイノベーティブな活動への発展可能性を高めるならば、そのような集団滞在する個人単位の学生をより目的的な長期滞在や集団事業につなげることが１つの方策であろう。つまり**せっかく来るようになった学生たちにとって自分事になるように、地域と学生との文脈づくりをする必要がある**。それは単に旅行や課外活動の場所として鳥羽に訪れるのではなく、そこで何か自分でも取り組んでみたいと感じたり、それを実行に移せたりするという関係性である。そのためには、学生と地域との文脈づくりを行う媒介者や仕組みが求められる。調査者自身の経験からしても、ただ答志島に観光しにきただけでは地域おこし協力隊や本調査研究事業に至ることはできなかった。市役所（特に所属の企画・財政課）の皆さんや、すでに鳥羽で活躍されている学生の先輩方、町内会や組合などで自治活動をされている皆さんに乗せていただいて、やっと成り立ったものばかりである。



4. 課題構造の分析（学問的な解釈）

前章までの内容をまとめると、以下のとおりである。ふたつのリサーチクエスチョンに対して、それぞれ現状を調査したところ、そこから仮説段階ではあるが課題や展望が明らかになった。





①「子どもたちは「ねやこや」をどのように意味づけ、変化させてきたか」というリサーチクエスチョンについては、遊びに来るメンバーや遊びのバリエーションが縮小・硬化しているという現状をまとめ、**子どもたちを「ねやこや」に文脈づける人や物の不在**という課題を仮説した。

②「「ねやこや」ではいかなる副産的関係性が生まれ、受容されてきたか」というリサーチクエスチョンについては、大学生が個人単位で滞在できる間口が広がり、特定期間での合宿が恒例になりつつあるという現状をまとめ、**合宿以外での地域と学生との文脈づくりをするという展望**を仮説した。

課題について解決策を提案する前に、本章では学問的な解釈を加えておきたい。すこし抽象的な書きかたになるが、それによって上記の仮説に至った考えかたの背景を伝えられると思う。また、地域の〈居場所〉をめぐる変化が、人間生活に基本的な公共空間の存在に関わる重要な論点であるということも伝えたい。

4-1 公共空間における意味の生産

空間が、ある人々にとって意味のある空間として存立するのは、生産される過程においてである（Lefebvre 1974[12]）。ここでいう生産とは、建物を建てて外から区別された容器をつくることではなく、そこで起こる行為や出来事が織りなす活動的な状態を生み出すこと（篠原 2007[13]）。つまり、**人々にとって意味のある公共空間――それは〈居場所〉のこと――をつくるということは、そこに関わる人々の活動的な状態を保持、促進すること**である。

かつての公共空間は、管理からの自由が争点とされ自治空間を目指すものであった。運動高揚期の 1960 年代のことである。現代の公共空間では、もはや管理からの自由に急かされているのではなく、むしろネオリベラリズムの趨勢下において自由が課されている。中間団体なしに個人が自由に誰とでも何とでも接続できる自由に開かれていると同時に、互いを守る緩衝帯なしに資本主義的な包摂や他者との差異に曝されているのである。結果として、個人は自らと同質な情動を有する閉域を求める。人々が求め、作る公共的情動はインターネットの同時性・双方向性によって加速するが、それは気分や感情の水準での一体化であって討論や交渉の余地はなく、むしろ異質なものは排除・無視することと相補的である（篠原 2017[14]）。

これは現代のポピュリズムや、エコーチェンバーの仕組みにもつながる議論である。もっと身近なところで言えば、飲み会に行きたがらない若者やオンラインゲームに夢中になる不登校児も、同じ構造のもとに生きていると、強引ながら考えられる。そのような現代で〈居場所〉をつくることは、人々が社会や世界に関わっていくための手がかりを見つけることに等しい。

4-2 子どもの発達段階

子どもの発達段階においても、社会や世界に関わっていくことは重要である。これまで家庭のなかで育ってきた子どもたちは、学校という規律集団に属するようになり、社会性を身につけていく。さらに自分たちで自分たちの遊び場所をつくっていくという創発性――それこそ〈居場所〉づくりの源泉――の萌芽が見られるのが、小学生である。

発達心理学上、小学校中学年は「ギャングエイジ」とも呼ばれる。それは仲間集団の中で独自の空間やルールを形成する時期であり、高学年にもなると自分の意思で居場所を選べるようになる。子どもた

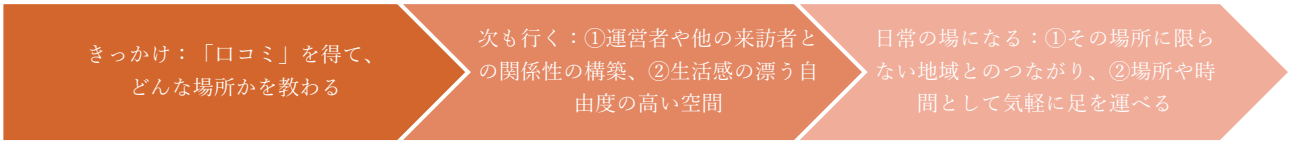
---

[12] Lefebvre, Henri. (1947). *La production de l'espace.* 齋藤日出治(訳)『空間の生産』青木書店

[13] 篠原 雅武（2007）公共空間の政治理論 人文書院

[14] 同上

ちが自分の意思で〈居場所〉をつくる心理的なプロセスとして、下記が挙げられる（富永 2021[15]）。子どもたちにとって重要なきっかけはいわば「口コミ」であり、すでに自分に関わりのある人からどんな場所かを教わることで、信用度や親近感を得る。そこから再度そこに行こうと思える要因としては、①運営者や他の来訪者と関係性を構築できたことや、②生活感の漂う自由度の高い空間で遊べたこと。さらに日常の〈居場所〉となるには、①その場所に限らず他の場面や文脈での地域とのつながりができ、②場所や時間として気軽に足を運べることが欠かせない。



4-3 〈居場所〉をとりまく構造的課題

「つくった〈居場所〉を持続可能な公共空間にするためにはどうしたらいいか」ということが本調査の大きな問いであったが、地域において〈居場所〉が継続するためには「段階的な参入と経験および地域のハブとしての役割が〔中略〕「地域活性」という効果に寄与するメカニズム」が必要であることが明らかになっている（石山・片岡 2017[16]）。まずは人々にとって段階的な参入方法があり（イベント参加、定期的に遊びに来る、裏方として関わるなど）、そこを窓口として参加者がその〈居場所〉ならではの役割を得る。それで新たな関係性や雰囲気が醸成されることで、無関心層・中間層も地域に興味や参加力を持つことにつながる。〈居場所〉の側としても、そのような参加者を受け止めるため、地域のハブとして多様な窓口・出口を開くことで地域活性化に寄与することができる。

これは地域住民を対象としているのみならず、今回でいえば大学生と地域でどのように文脈づくりをしていけばいいかに答えるメカニズムであると思われる。つまり外部の潜在的人材を地域の生活構造に組み込んでいくには、①段階的な参入窓口を用意していること、②新たな役割を個別に付与できること、③それら多様な窓口・役割を提供できる地域のハブであること、が必要であると考えられる。

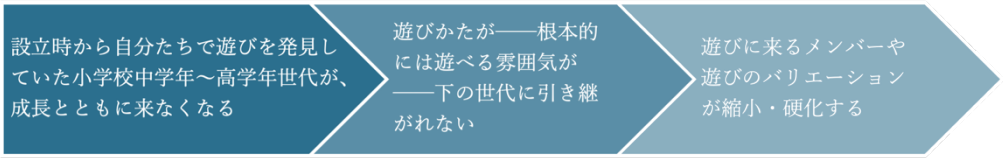
---

[15] 富永 由佳（2021）．子ども自身が身近だと感じる居場所の研究 JSSD5rh2021

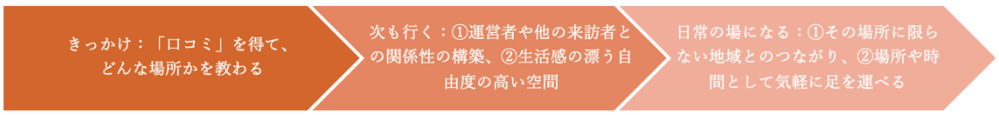
[16] 石山 恒貴・片岡 亜紀子（2017）．地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果 地域イノベーション, 9, 73-86. この考察は目的交流型サードプレイスに関するものであることには注意。図は調査者作成。

これまでまとめてきた現状を示した図と文脈づくりの構造図とを見比べてみると差異がわかる。「ねやこや」に遊びに来る子どもたちに関する負のフロー（青）を断ち切るためには、正のフロー（赤／上）を参照する。きっかけづくりや「日常の場」としての条件は土地柄すでに満たしているため、「次も行く」の内容が重要である。和具地区に関係する大学生に関する組織図をより発展させる（緑／矢印）ためには、正のフロー（赤／下）を参照する。参入の窓口はすでに存在しているため、「参加者が役割を得る」ことが重要である。これらはそれぞれ、子どもたちを「ねやこや」に文脈づける人や物の不在という課題を解決し、合宿以外での地域と学生との文脈づくりをするという展望を実現するための手がかりになるはずである。

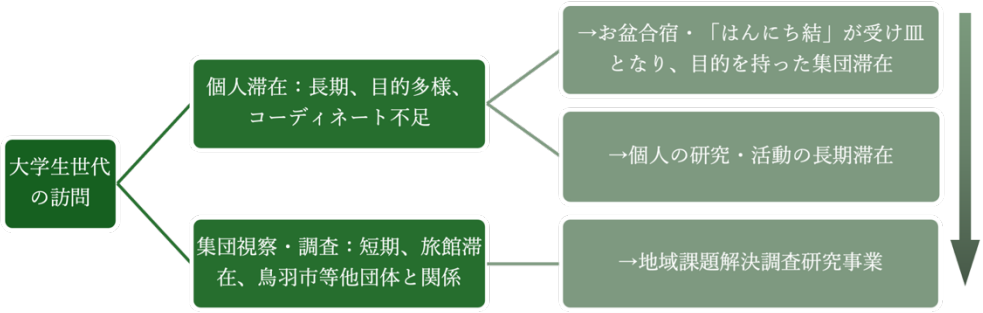
現状図：①子どもたちは「ねやこや」をどのように意味づけ、変化させてきたか



概念図：子どもたちが自分の意思で〈居場所〉をつくる心理的なプロセス



現状図：②「ねやこや」ではいかなる副産的関係性が生まれ、受容されてきたか」



概念図：段階的な参入と経験および地域のハブとしての役割が地域活性に寄与するメカニズム

5. 課題解決に向けて（現場への提案）

ここまでの内容をふまえると、子どもたちを「ねやこや」に文脈づける人や物の不在という課題を解決するためには、子どもたちが「次も行く」と思えるような文脈づくりが必要であった。また、合宿以外での地域と学生との文脈づくりをするという展望を実現するためには、学生たちが「役割を得る」ことができるような文脈づくりが求められていた。

つまり本調査で明らかになった課題は、個別の活動の改善に関するものというより**人材と地域資源を接続する中間支援機能の不在に起因する構造的問題**である。したがって鳥羽市には、個別活動への直接介入というよりもむしろ**関係主体間の調整および制度設計を担う役割が求められている**と提言したい。

以下、瑣末なものの羅列にはなるがアイデアを残しておきたい。

◆ 小中学校やスポーツ少年団など各種地域活動との接続
新規事業ではなく既存の教育活動の枠内で〈居場所〉を会場として定期利用してもらう。「学校帰りに立ち寄る空間」「月 1 回のクラブ活動の空間」といったかたちで、すでに成立している子どもたちの遊びや生活の文脈に、その空間を舞台として組み込むことにつながる。

◆ 地域おこし協力隊やこどもの居場所コーディネーター[17]の配置
常勤でなくとも「月数回の現地関与＋関係者調整」を担う人がいるだけで、子どもたち・大学生・〈居場所〉の文脈を整流することができる。子どもたちが来たくなる仕掛けづくりや大学生が地域に関わりたくなる仕組みづくりは現場でたてていくにしても、その結節点となる人材やポストがあれば、地域のハブ機能を果たしやすい。

◆ 〈居場所〉間のネットワークの構築・活用
鳥羽市では生活困窮者支援活動団体助成事業が〈居場所〉間のネットワークを果たしていると思われる。その〈居場所〉の子ども同士で遠足を企画したり、運営者が互いの現場をまわったりして人々が流動することで、その人々に付随して遊びかたや過ごしかたが、新しい文脈を生むことが期待できる。(事例：子ども第三の居場所ネットワーク[18])

---

[17] こども家庭庁「こどもの居場所づくりコーディネーター配置等支援事業について」https://www.cfa.go.jp/policies/ibasho/654d7f43

[18] 日本財団「離島ならではの子ども支援を学び合う。奄美群島に拡がる、子ども第三の居場所ネットワーク」https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/activity/96619?utm

◆　地域産業参加型の合宿の応用・拡大

「はんにち結」の形式の取り組みを基盤に、地域産業参加型の学生滞在モデルとして整理・制度化する。学生を受け入れる時期・場所を鳥羽市内の産業に合わせて複数整備することで、より広範囲で大人数の募集ができるとともに、学生も多角的に地域のことを知ることができる。（事例：漁村滞在型旅行「渚泊」[19]）

◆　学生の滞在拠点づくりと宿泊産業との接続

合宿に参加した大学生の新たな文脈づくりとして、滞在拠点の開拓。清掃・片付けで空き家を使えるようにしたのち、拠点として活用する。学生の滞在しない期間には、既存旅館等の管理・運営のもとで民宿として活用することで、宿泊産業との接続を図る。（事例：「まちやど」普及事業[20]）

◆　地域課題解決調査研究事業でのメンター制度

応募のための事前資料づくりや採択後の調査研究において、１団体１人の市役所職員や地域で活動している先輩がメンターとして担当してもらう。大学生としては地域の情報資料や人間関係に馴染みやすくなり、地域としても要望や実情を伝えやすくなるため、大学生と地域との文脈づくりや適切なマッチングに寄与すると思われる。なお現在の実施報告書の公開化は情報資源としても有意義になっていると感じる。

本調査で明らかになった課題は、人材と地域資源を接続する中間支援機能の不在に起因する構造的問題であった。子どもの居場所づくりや外部人材の受け入れといった取り組みは、それぞれ単独でも成立しうるものの、それらを地域の生活や産業の中に継続的に文脈つなげていくためには、関係主体間を調整し、全体像を見渡す役割が不可欠である。一方で、このような**中間支援機能は、特定の個人の存在や関係性に依存しやすい。制度やポストとして位置づけられていたとしても引き継ぎが難しい**ものである。地域の公共空間を支えるために、今後の重要な検討課題であると考えられる。

本調査は、具体的な解決策を提示できるものではなかったが、施設整備や事業実施といった個別施策を超えて**「公共空間における関係性をいかに持続的に支えるか」という観点の必要性を示した点に意義がある**と考える。鳥羽市にあたっては中間支援的な機能について、既存の人材や制度の活用も含めて検討していただくことを期待する。

---

[19] 水産庁「海業の先行的な取組事例」https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/r05_h/trend/1/t1_f_2_2.html?utm

[20] 「地域の稼ぎ」を高める空き家活用「まちやど」普及事業 https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/content/001403565.pdf

6. おわりに――調査の限界と展望

新たな〈居場所〉をつくること、それを続けることは、どの地方自治体においても求められていることだと思われる。**「ねやこや」を事例として、持続的な公共空間のために何ができるのか**検討に活かしていただけたら幸いである。なおこの調査結果は、より長期的なプロセスにおける一時点にすぎないとみることもできる。建物が改修されて5年も経たない期間の調査であることをふまえ、さらに長期的追跡の必要性があること、学術的にまとめる意義があることを主張しておきたい。

調査者は大学院生であり、これから約1年、追加で調査を実施予定である。修士論文では、地域での居場所づくりの事業に対して子どもたちが本当に自分の〈居場所〉だと思えるようになるためには、どのような遊びをとおして、どのような生活の文脈に取り込み、どのような心理的なプロセスを経るのかを研究している。本報告書では収まらなかったが、フーコーをはじめとする哲学、ルフェーブルをはじめとする空間論、そして臨床心理学の知見を合わせて論じたいと考えている。子どもの〈居場所〉づくりのプロセスは、現代日本のトピックとしても学際的な研究対象としても、興味深いものだと思うからこそである。

お世話になった答志島、ひいては鳥羽市にはこれからも関わり続けたい。海が綺麗で、人が優しくて、空気がいい。それに私は惚れ込んで、移住体験からあれよあれよと地域おこし協力隊や研究するにまで至った。どうか末長く、鳥羽市に暮らすみんなが幸せであるといいなと願うと同時に、ここで育つ子どもたちに少しでも良い思い出を増やしたいと思う。鳥羽市のますますの発展を心からお祈りして、報告を終える。

付録：調査期間内の活動記録

- 運動会の観覧、参加（5 月 24 日）

  保育所、小・中学校合同ということもあり、子どもたちの成長を最も目にできる行事だと思う。今年は和具町内会として綱引き、婦人会の皆さんと一緒に鳥羽物語の踊りに出させていただいた。子どもたちに加えて、先生方や保護者の方々にもご挨拶する機会になってよかった。自分ひとりでは非力ではあるものの、定期的に地域行事にて顔を見ていただくことで「ねやこや」や協力隊という制度に関心を持ったり、現状を知ってもらうアウトリーチとして機能できたらと思う。

- 夏の渡島や「ねやこや通信」に向けた打ち合わせ（7 月 15～18 日）

  協力隊 OB（正林泰誠さん）、横浜国立大学「島プロジェクト」メンバーとオンライン打ち合わせ。夏の渡島での日程確認や「ねやこや通信」（夏号）の内容調整を行なった。のちに渡島して、町内会長等から通信の掲載内容や印刷・配布方法について確認。

Fig. 9 作成途中の「ねやこや通信」夏号

- お盆合宿に後輩を連れて参加（8 月 12～16 日）

  学部在学時の後輩（京都大学・磯部新くん、古勝敦子さん、吉田理帆さん）を帯同して合宿に参加。また同時期に、サンシャインビーチ「ケンちゃん家」でのアルバイトのため同じく京大生（田浦未来さん）が滞在していため、様子を伺いに渡島した。また習い事の剣道つながりで（京都府剣道連盟・上野律子さん）も日帰り旅行にお誘いした。横国「島プロ」が進行してくれて、子どもたちに向けた夕涼み会の屋台番（12 日）、ねやこや夏祭り（13 日）、盆踊り（14 日）、和具地区でのビンゴ大会のアシスト（16 日）などにおじゃまさせていただいた。学生がここまで地域行事に入らせてもらえるありがたさを忘れず、人数が増えてもわきまえて行動することを心がけたい。

Fig. 10 盆踊りでの集合写真

➢ 「ねやこや」での調査（9 月 10～14 日）

5 月の運動会時や 8 月のお盆時は子どもたちにとって非日常の時期であったことから、通常の放課後の様子・経過を調査する目的で渡島。調査中は名古屋市立大学院臨床心理コースから協力者として 5 名（大西愛果さん、川瀬七望さん、伊藤ゆり、丹羽真優さん、山内まひるさん）を招いた。いずれも臨床心理士資格を取得予定で、実習等で児童・生徒のメンタルヘルスに詳しい学生であることから、島の子どもたちについての所見に助言を求めた。また、三重大学 NELcrew の皆さん（特に松本愛莉さん）、調査中の教授陣（国際ファッション専門職大学・磯部美里さん、名古屋大学・坂部晶子さん）とも数年越しに顔を合わせる機会に恵まれた。遊びに来てくれた子どもたちとの交流を深めた。また、トロさわら宣言の見学（10 日）、通称リサイクルまつりへのゴミ出し（16 日）などで、子どもたちに限らず地域の皆さんと話す機会を設けた。

Fig. 11 集荷場にて「トロさわら宣言」

Fig. 12 「まるみつ寿司」にて名市大学生

➢ 京都大学熊野寮祭で「答志島わかめスープ」のふるまい（12 月 5 日）

寮祭では令和 5 年度から毎年わかめスープのふるまいを続けている。中華風スープのシンプルな味つけだが、わかめが美味しいため毎年盛況で、今年は 80 杯以上になった。ふるまいと同時に 3 月のわかめの手伝いを募集。現在、答志島に興味がある寮生で LINE グループで連絡網を設けており、これで累計 41 名となった。

Fig. 13 募集のために作成・掲示したポスター

➢ 海の子フェスタの見学（12 月 6 日）

小学生の文化祭。運動会と並んで毎年観覧におじゃましている。作品展示や劇など、練習の成果が伝わってきた。

Fig. 14 壇上の劇を見守る保護者陣

➢ 島の旅社にて写真展示準備（12 月 6～7 日）

同日程で、島の旅社の皆さんとその英語講師（チェ・ソヒさん）のアシスタントとして、アリーナでの写真展示の準備を行なった。展示する伝統行事のリストアップや、キャプションの作成など。

➢ 新年のあいさつと次年度協力隊の推薦（1 月 5～7 日）

スポ少（野球）の練習を見におじゃましたり、お家で夕飯をいただいたり、より個別で話を訊く機会に恵まれた。また、田浦未来さんにも同行してもらい、地域おこし協力隊インターンの日程調整や、組合職員と「はんにち結」での事務作業の打ち合わせ。今回は、漁家向けの「はんにち結」募集要項の配布物を作成して組合に託した。

➢ 「海と暮らす」の編集（11 月～12 日）、出展（1 月 18 日）

自主制作している文芸季刊誌にて「海と暮らす」特集号を作成。鳥羽市で出会った皆さんを中心にお誘いし、私自身も鳥羽での暮らしを回想するような文章を寄稿した。執筆協力者は、正林泰誠さん（東京大学院）、山本翔也さん（大阪大学院）、佐古田晃朗さん（京都大学院）、岩尾豊紀さん（水産研究所）。文学フリマ京都に出展し、20 冊近くを頒布した。

Fig. 15 出展ブースにて

Fig. 16 季刊誌（Vol.2）の表紙

➢ 漁家向け説明会の準備（1 月 30 日～2 月 1 日）

組合の担当者さんに協力いただいて、協力隊ＯＢ（正林泰誠さん）、インターン予定者（田浦未来さん）と日程・式次第を準備。「はんにち結」申し込み漁家向けの説明会を実施した。制度化して数年で参加漁家・参加学生は増えており期待を感じる一方、それで地域に悪影響が出ないよう気は引き締めなければ、という所感。また、同日程で開催されていた離島医療会議の参加者の方々にすこしだけご挨拶と、オンラインで一部視聴。

Fig. 17 説明会に集まってくださった漁家の皆さん

➢ 「ねやこや」での調査（3 月 6～8 日）

前回の調査から半年のタイミングで再度調査。今回は京都大学の後輩（吉田理帆さん）が 1 ヶ月ほど滞在していたこともあり、調査期間外の様子を教わったり、大学生がどのように島に持続的に関係していけるのか助言をもらったりした。また同行してもらった京大生（藤川太壱くん）と「はんにち結」期間中に学生が滞在する空き家の掃除や布団の整備等も行なった。8 日は和具地区でのわかめ刈り取りの解禁日ということもあり、漁家さんに挨拶まわりも兼ねた。

➢ 「はんにち結」の参加（3 月 19～22 日）

知り合いが知り合いを呼んで、今年の「はんにち結」には総勢 16 名の京大生が応募してくれた。この期間中は、私が直接誘った子たちも多かったため同行。来年度以降の寮での周知方法や、学生同士の情報共有について話し合うこともできた。

Fig. 19 空き家で集まって夕飯

Fig. 18 わかめを手伝いに出る朝

➢ 「はんにち結」の参加（3 月 25～28 日）

午前中はわかめの作業、午後から何度か子どもたちを見送る機会に誘っていただいた。スポ少（剣道）の稽古では、4 月から高校に進学する子たちや離島留学を終える子たちを見送る会に参加させていただいた。離島留学のご家族については「ねやこや」での送別会にもおじゃまし、出発前日には引っ越しの手伝いにも声をかけていただいたので奮闘。子どもたちの成長は私たちの時間感覚と比べものにならないほど早い。貴重な時間を一緒に過ごさせてもらっているのだと改めて実感した。

Fig. 20 最後の稽古での集合写真